

転倒骨折の体験を 乗り越えて

—患者体験談—

花田 克彦



高齢層の転倒骨折の事例が、最近特に多く見られるように思う。かいう私自身も、そのような体験を乗り越えて、現在はりハビリに精を出している毎日である。

忘れもしない平成13年5月31日、この日はたまたま私用で会社を休んでいたが、車で出かけようとして会社に置き忘れた鞆の中に免許証が入っていることを思い出し、午後3時ごろ会社に向かった。中に入ろうとして出入口前のわずかな段差のついたコンクリートに右足の爪先がひっかかり、そのまますぐ前方へコンクリート面に叩きつけられるようにして転倒、数秒間だが一瞬気を失った。かなり大きな音がしたらしく、気がついたときには建物の中にいた数人が飛び出してきて、倒れた私の横でただ呆然と立ち尽くすといった状況であった。

私自身気がついて立ち上がろうとしたが、左肩が全く動かない。右手で左肩の肩甲骨をぐっと押してみたが痛みはそれほどもなく、その下に指が2本ほど入る隙間があるような気がしたので、とっさに脱臼だと判断した。実はこれが後々大変な思いを引き起こすことになるのだが、若いころ色々なスポーツをやっていたので、何度も経験したことであったし、すぐに友人の接骨院に連絡をして社員の車で向かった。しかし渋滞に巻き込まれ、転倒してから1時間以上経過しても到着しない。この間車中での苦痛は口では言い表せないほどのもので、何度も気を失うのではないかと思ったほどだ。

やっと接骨院に着き、友人にすぐにはめてくれと伝えて施術してもらった。ガクッという音がして、ぶら下がっていた腕が正常に戻った気はしたが、全然痛みが治まらない。少しおかしいのではないかと尋ねたところ、どうも角度がおかしいのでもう1度入れ直してみようということになり、1度はめた関節をはずして再度試してみた。しかし、どうしても痛みが激しく、動かすこともできないほどで、これは整形外科でレントゲン検査をしなければだめだということになり、紹介してもらった外科医院に向かうことになった。

診察の結果、こんなものをよくも2度にわたってはめこんだものだと、先生があきれた様子でおっしゃった。状態を聞いてみると、左肩関節の骨頭およびその周辺の骨はバラバラになっていて、復傷した関節の骨頭は90度角度を変えてはまっていたとのことであった。これはもう小さい医院では手術は無理だということで、紹介状を持って

翌日天理市内にある「天理よろづ相談所病院(愛称・憩いの家)」に行くことに決め、ようやく帰宅したときはすでに夜の9時を回ったところであった。その夜は一晚中横になることもできず、椅子に腰掛けて一睡もしないまま、翌日天理よろづ相談所病院の整形外科に出向いた。ここでの出会いが、その後多くの貴重な体験を得るきっかけとなった。

担当は整形外科副部長の西松秀和医師であった。西松医師の最初の一言が、「これはもうどうしようもない」であった。骨頭がバラバラで、既に自分の骨で修復は不可能であったし、手術の方法は少し考えさせてくれということであった。

私自身どうなるのだらうという不安を抱えたまま、数日が過ぎ、西松医師から手術について説明をするから家族と一緒に来てほしいという連絡があった。私としては別に命にかかわるような怪我でもないし、なぜ家族まで呼んで説明をする必要があるのかと不思議に思ったが、家族を連れて出向いた。西松医師の説明によると、左肩関節部分が骨頭を含め周辺の骨もバラバラの状態なので、骨頭部を人工肩関節に換える以外に方法はないとのことであった。それはもう仕方ないことだと思ったが、過去にも数例の人工肩関節置換手術の事例はあるが、結果の満足なものは少なく、正直言ってあまり自信はないとの話であった。ただ最近新しい人工肩関節が出て、これが非常によい結果を出しているの、これを使ってみようと思うとおっしゃって見せていただいたパンフレットの写真が、(株)東機貿から出されたという輸入品の人工肩関節であった。ゴルフのドライバーを小さくしたような形で、私のような素人には今まで人工肩関節とか骨頭など耳にしたこともない言葉であったし、実際に写真を見て、これが私の体内に入るのかと思うと少し不気味な感じがしたのも事実である。ただ、本職の西松医師がこれしか方法がないとおっしゃるのであれば仕方ないこともあるし、すぐに承諾した。ただし、人工肩関節を入れるにしてもそれを支える私自身の骨の状態が一番問題で、年齢も年齢だし、もしも骨が弱ければ置換手術が不可能ということも考えられるので、この場合は諦めてほしいとのことだった。諦めるというのはどういうことかと尋ねたところ、左腕の回復はもはや不可能であり、バラバラした状態のままになってしまうだろうという過酷な宣告を受けた。



花田 克彦 / はなだ・かつひこ
1931年、大阪に生まれる。49年、大阪府立城東工業高校電気科卒業。73年、株式会社花田電気商会を設立、現在に至る。

西松医師の指導のもと、
自分用に製作したリハビリテーション器具



フランストルニエ社製 エクリス人工肩関節

このときになって初めて、自分が実は大変な怪我を負ったのだということを痛感した。しかし、ここまでくればいくら考えても無駄であるし、西松医師に全てを任せてお願いしますということで、それから数日後の6月12日に手術をすることが決定した。それまではただ痛みを我慢するだけの日々で、あまり心配もせず、なるようになるだろうと考えて毎日を過ごした。ここまで怪我をしてから数日間、接骨施術、入院日から手術の日まで、痛いという言葉を口にできなかった私に接骨医の友人も驚いていたが、この辛抱強さは戦争の経験によるところも大きい。戦前、戦中毎日のように空襲に遭い、12歳のとき空襲による怪我で左足を13針も縫う手術を麻酔なしで受けたことがあった。このときも痛いという言葉を一言も発せず、医者を驚かせた。昭和一桁生まれの頑固さと強情さを今も持ち続け、功罪相半ばしたが、これが私の一生でもあるのだろう。

ただここで特筆したいのは、入院中、この総合病院での看護婦さんたちの献身的な看護、優しさである。憩いの家独特の宗教の心がもとにあるとはいえ(*)、これだけの奉仕精神を教育された諸先生方にはただただ頭の下がる思いがした。これだけ大きな病院で、数知れぬほどの勤務者を教育できる組織が存在するのを実体験して、私自身小さな組織の長として自身の怪我以外に大きな教訓を得た思いがする毎日であった。

そして手術の日を迎えた。8時過ぎに病室を出て9時から手術が始まり、終えたのは午後1時ごろだったと思う。その日の夕方、西松医師から「手術はうまくいったよ」と言われ、骨も筋肉もしっかりしていたと聞いたときには、若いころ鍛えぬいた効果が今でも残っていたなと思ったものである。

その後この西松医師は、さすがに前述した看護婦さんたちの上に立つ人だけあり、忙しい診察の合間に、ときには夜の9時10時の帰宅前に、病室に顔を出していただいた。「調子はどうですか」の一言が患者にとってどれだけ勇気づけられるものかを実感する日々であった。さらに、いかに職業とはいえ、一般の社会や私自身のことも含めて、お客さんの立場に立ってという考え方がここまで徹底できるものかと思うと、頭の下がる思いと反省の毎日であったのを今でも感ずる次第である。

現在、手術から1年が経過したが、私の場合、腕を上方へ挙げる

筋力が弱いことや年齢のこともあって、リハビリテーションにはそれなりの時間が必要のようだ(筋力や年齢によって一概には言えないが、通常は3ヵ月～1年間のリハビリ期間を要するようである)。しかし、自分用に製作したリハビリテーション器具を使用したり、プールに通うなどして、地道にリハビリを続け、徐々に腕が挙がるようになってきている。若干の痛みは残るものの、経過は順調だとのことのお話もいただいている。私自身手術を受けたことに対して後悔は全くないし、また手術を受けなければ腕が動かなくなることも考えられたことを思うと、西松医師と新しい人工肩関節に出会えたことを幸運と感じている。今後も、西松医師の名誉にかけて、またこの新しい人工肩関節を開発されているトルニエ社や、これを輸入されている(株)東機貿の期待に沿うべく、私のリハビリへの挑戦を続けていきたい。

終わりに、西松医師のますますのご活躍と、親切な看護婦さんたちへの感謝の気持ちを、この誌面をお借りして申し上げる次第である。また、入院中多くの高年齢者の骨折事故を目にしてきたこともあり、(株)東機貿にはこれからも様々な優れた医療器具を世の中に出していただきたいと思う。さらなる研究努力を期待してやまない。

最後に、編集部として西松医師に花田氏のことをお伺いした際、下記のようなお言葉をいただいたので、ここにご紹介させていただく。

「現在のエクリス・リハビリテーションには、患者がプールを活用することも含まれている。しかし、日本でプールを活用することは設備としても厳しいものがある。花田さんが製作された器具のように、日常生活で容易にリハビリテーションを行えるものがあることが望ましい。花田さんのようなアイデアマンはそうそういないので、リハビリの器具面についても(株)東機貿の努力を期待したい。また、リハビリの方法については医師向けだけでなく、日常生活において継続的にリハビリを行わなくてはならない患者のために、読んで理解しやすい患者向けの資料を充実させるべきだと考えている」。

(*)財団法人天理よろづ相談所病院は、天理教の教えに基づいて設置・運営されている。